つどい

青森県偕行会「第2回弘前忠霊塔例大祭」等に協力

会長　稲村　孝司　陸自75期

7月28日「第2回弘前忠霊塔例大祭」が行われた。遺族会や県偕行会、県隊友会、弘前駐屯地などの関係者や国会議員、県議ら約50人が参列し、戦没者を供養するとともに平和への祈りを捧げた。

県偕行会は、例大祭への協力はもちろん、前日の同塔周辺の草刈り清掃奉仕にも現役自衛官75名の協力を得て奉仕した。同草刈り清掃奉仕は昨年までは8月の第1土曜日に行っていたが、今年からは例大祭前日に行うこととなった。草刈り清掃が終わった会場では、引き続きテント張り等の例大祭準備に汗を流した。テントは学校での運動会等で使われている鉄パイプの8本支柱の重いもので、高齢役員12名による作業は難儀なものだった。テント張りの後には、来賓者用の椅子、一般参列者用のパイプ椅子を並べ、忠霊塔本堂での慰霊行事の中心となる、弘前市を代表する長勝寺、本行寺、川龍院及び久渡寺の4住職による読経の準備を行った。

例大祭は、あいにくの降雨の中、午前9時から準備に取り掛かり、午前11時から国歌斉唱に始まり、慰霊行事として四住職による読経及び「英霊のご氏名の読み上げ」による戦没者の慰霊が行われた。読経の間、参列者は本堂で順次焼香を行った。引き続き、例大祭行事に入り、須藤住職の挨拶、来賓として弘前市長、木村次郎衆議院議員、阿部広悦英霊にこたえる会会長が挨拶した。祝電披露の後、海ゆかばを斉唱して交歓会へ移行した。

交歓会は、長勝寺内の「御成りの間」で行われた。長勝寺は津軽家の菩提寺で、同室は殿様のために設けられた床の間であった。同室への移動は、忠霊塔から長勝寺の庭に面した縁側まで、約150メートル歩いてとなった。交歓会は、弘前市福祉部長、遺族会会長、県議会議員、市議会議員等に対して、忠霊塔を守る会の活動を紹介し、戦没者の慰霊の場として維持・管理に一層の理解を深める機会となった。来賓退場の後、役員は会場の後片付けに汗を流した。飲んだビールや酒も醒めてしまう暑い中での作業となった。同会には、小生始め当会三上会員、帯川会員、北畠会員、渋谷会員、田中会員及び櫻庭会員の七名が参加した。

その様子は、翌29日に地元新聞東奥日報及び陸奥新報の各一面に大きく報道され、県民及び市民の大きな関心を呼んだ。

東奥日報では、タイトル「県人戦死者の鎮魂願う　弘前忠霊塔『守る会』が例大祭」と共に忠霊塔を背に「あいさつ」する須藤住職の写真が掲載された。

陸奥新報では、タイトル『戦没者供養し平和祈る「弘前忠霊塔」で例大祭』と共に忠霊塔と大祭会場のテントの写真が掲載された。

東奥日報
7月29日(月)
県人戦死者の鎮魂願う
仏前忠霊塔「守る会」が例大祭

戦没者供養し平和祈る
「弘前忠霊塔」で例大祭
THE MUTSU SHIMPO
陸奥新報
7月29日
月曜日

例大祭翌日は、更に強くなった降雨の中、テントの撤収作業を役員でもある偕行会員3人で行った。テントの貸し主である地元堀江建設の社員・操縦手と助手2人の支援があったものの、重い支柱と濡れたシートの回収は老体に応えた。

7月も終わり、いよいよ8月は「弘前ねぷたまつり」である。弘前桜祭りに合わせて5日間全室を一般公開したのに続き、同まつり期間中とお盆となる中旬の6日間も忠霊塔本堂、納骨堂、礼拝の間など全室を一般公開した。時間は午前9時から午後4時までの間で、毎日2名の役員が説明に当たった。偕行会員は6日間7名が担当し、小生は8月1日、ねぷたまつり初日を担当した。

来場者には、まず、本堂前の常時開放室に掲示されている青森県戦没者銘板・2万9176柱の氏名と約1700の骨壺を説明する。あわせてお釈迦様の仏舎利及び三蔵法師の霊骨が納められている、全国でも希少な忠霊塔であることを加える。引き続き、本堂に案内し、仏舎利及び三蔵法師の霊骨が納められている金庫と忠霊塔の本尊・木造の軍神像を説明する。次いで、拝礼の間を通り第一展示室では、戦争の記録をパネルを使って説明する。引き続き、納骨堂四室を時計回りに案内し、第二展示室では、特攻隊の記録を写真、遺書、パネルで説明する。来場者で特異と感じたのはフランスから

の家族であった。パリではオリンピックが開催されている中、案内はもちろん日本語で、説明板も英語であり、どれ程理解されたか心配したが、十代の子供2人とご夫婦は戦没者の骨壺に真剣な眼差しを向け、畏敬の表情を浮かべていた。約30分の案内説明は、戦没者の慰霊と顕彰、戦争の意義理解に寄与できた満足感を得た貴重な体験となった。

全国の陸修偕行社会員の皆様、ぜひ弘前を訪問してください。青森県偕行会がご案内致します。